



動物愛護推進員について

地域の身近な相談者として活躍

みなさんは「動物愛護推進員」を知っていますか？
知らない！という方が多いのではないかと思いますので、今回は広島県の動物愛護管理行政において欠かせな

い存在である動物愛護推進員について、ご紹介します。
県は、「動物の愛護及び管理に関する法律」に基づき、県の政策に協力し、動物愛護活動を行う人材として、動物愛護推進員を委嘱しています。

現在、県内13市町※でさまざまな資格を持つ、総勢40名が活躍しています。
動物愛護推進員は「動物愛護」と「適正飼養」の重要性について、県民のみなさんに伝えていく地域の身近な相談者です。



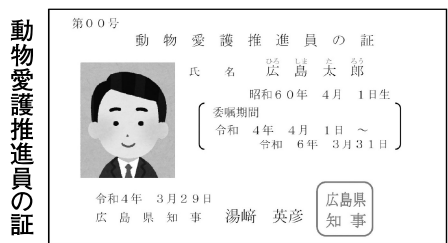
動物愛護センターのオープニングイベントでは、動物愛護推進員が、迷子札作成や啓発パネルの展示などを行いました。

動物のことに興味、推進員に話を聞いてほしい、相談してみたいなどのご希望がありましたら、県動物愛護センター(0848・60・8511)までご連絡ください。

渡会、県と協力しての災害時動物救護活動などがあります。

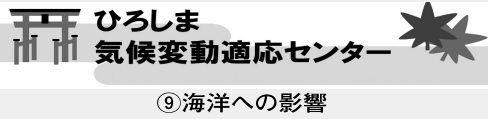
動物愛護推進員を紹介いたします。

※広島市、呉市、福山市については、県とは別に各市で動物愛護推進員を委嘱しています。



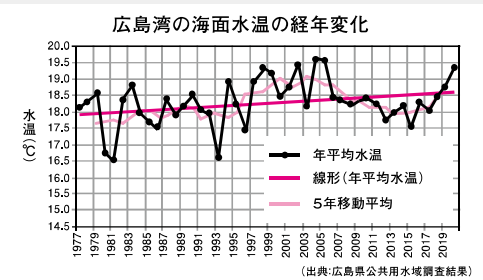
安心して相談してください。
(広島県健康福祉局 食品生活衛生課)

100年間で1.24℃上昇 気象現象や自然生態系に影響



⑨海洋への影響

日本近海の過去約100年間の年平均海面水温の上昇率は、+1.24℃/100年であり、世界全体の年平均海面水温の上昇率(+0.60℃/100年)よりも大きくなっています(「気候変動監視レポート2022、気象庁」による)。この値は、日本の気温の上昇率(+1.30℃/100年)と同程度の値です。日本近海は海域別で海面水温の上昇率が異なりますが、ほとんどの海域で、信頼水準99%以上で有意な海面水温上昇がみられています。



昨年度のセミナー会場の様子

また、広島県公共用水域水質測定結果(1979～2020年)によると、広島湾の水温は、10年あたり0.16℃のペースで上昇しています(左下図)。データ取得期間が異なるため単純には比較できませんが、これは日本の平均海面水温の上昇よりも高い値です。

海水温は、気流や降雨などの気象現象だけでなく、海域や周辺陸域に生息する多くの生物、自然生態系に影響を及ぼします。

ひろしま気候変動適応センターでは、2023年12月1日(金)13:30～16:30に、「気候変動の海洋と瀬戸内への影響」と題して「令和5年度ひろしま気候変動適応セミナー」を広島県健康福祉センター(広島市南区皆実町一丁目6-29)で開催します(オンライン同時開催)。

今回は、海域及び瀬戸内の自然生態系に注目した内容となっています。11月26日(日)まで参加募集しますので、ぜひお申込みください(詳しくは二次元コードからHPをご覧ください)。

(ひろしま気候変動適応センター)



災害ボランティアセンターとは①

被災者中心、地元主体、協働の3原則

(以下、災害ボラセン)です。

1995年、阪神・淡路大震災を「ボランティア元年」とし、現在では、ほぼ必ず地元社会福祉協議会が主体となり、災害ボラセンが設置されるようになりました。

しかし、災害ボラセンが今の形になるまでには、さまざまな失敗や後悔、本心にこれで良かったのか、という過去の積み重ねがありました。

その中で生まれたのが「被災者中心」「地元主体」「協働」の3原則です。

「これは災害ボラセンではない、」などの組織の限界、論理が優先され、被災者自身を置きざりにしてしまつた過去をいさめ、被災者に寄り添うことを忘れないための「被災者中心」。

「何かしたい」「過去の災害ではこうだった」、ボランティア・支援者の思い、経験が先行し、被災者、地域が疲弊した経験から生まれた「地元主体」。

そして、多様な課題に対し、被災者だけ、行政だけ、ボランティア・支援者だけでは解決できない課題を何と

かしたいという思いで生まれた「協働」。

災害ボラセンは、この3原則を踏まえ、被災者、地域とボランティア・支援者を結び、生活再建、地域復興に取り組んでいます。

もし、皆さんの地域で災害ボラセンが立ち上がったなら、この3原則を意識して運営されているか、もしそうでなければ、時に苦言を呈しつつ、協働の気持ちで災害ボラセンに関わってもらえればと思います。

(特定非営利活動法人 ひろしまNPOセンター)

増田 勇希



2020年(令和2年)7月豪雨で、多機関が集まる共有会議(上)、西日本豪雨(平成30年)で、地元主体でボランティアの受け入れを行う(下)